☆年間第22主日（8月30日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（エレミヤの預言　２０章７～９節）

主よ、あなたがわたしを惑わしわたしは惑わされて
あなたに捕らえられました。
あなたの勝ちです。
わたしは一日中、笑い者にされ人が皆、わたしを嘲ります。
わたしが語ろうとすれば、それは嘆きとなり
「不法だ、暴力だ」と叫ばずにはいられません。
主の言葉のゆえに、わたしは一日中恥とそしりを受けねばなりません。
主の名を口にすまい　もうその名によって語るまい、と思っても
主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じ込められて
火のように燃え上がります。
押さえつけておこうとしてわたしは疲れ果てました。
わたしの負けです。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙　１２章１～２節）

兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。 自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。 これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。 あなたがたはこの世に倣ってはなりません。 むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、 何が神の御心であるか、 何が善いことで、神に喜ばれ、 また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

福音朗読　（マタイよる福音書　１６章 ２１～２７節）

そのとき、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、 長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、 三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。 すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。 そんな

ことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。 神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、 自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、 わたしのために命を失う者は、それを得る。 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。 自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。 人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、 そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　まだまだ暑さが続きますね。皆様お元気でいらっしゃいますか。世の中は季節とともに大きく変わろうとしています。変化の激しい時ですね。
このような時でも変わるものに惑わされることなく、神様が私たちを導いてくださっていることに信頼し力強く前に進みましょう。
　今日の朗読は困難に直面した時の私たちに信仰の在り方に焦点を当てています。エレミア預言者も、イエスも多くの迫害に直面します。
その時の心情を私たちに当てはめて考えてみましょう。

第一朗読　（エレミヤの預言　２０章７～９節）

　エレミアは主から促されて主の言葉を当時の人々に告げ知らせます、その言葉はよい知らせではなく、危機の到来や民の破滅に関する知らせでした。そのためにエレミアはあざけりやそしりなどの迫害を受けるのです。
その任務からどんなに逃れようとしたことでしょうか。「私は疲れ果てました。私の負けです」とまで、弱音を吐くのです。現代においても多くの苦しみや悲しみに打ちひしがれる私たちはエレミアの心情が良くわかります。
しかし救いはあります。エレミアは孤独のうちにこの艱難を耐えているのではなく、主である神に、その心の内を打ち明けていることです。この言葉

の後にエレミアは力強く述べています。「しかし主は恐るべき勇士として、私とともにおられます。‥主は悪を行うものの手から助け出してくださる」と。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙　１２章１～２節）

　手紙のこの個所からはパウロはキリスト者としての生活の在り方を述べています。自分の体は神に喜ばれる聖なる生け贄となるようにしなさいと勧めています。そのためには私たちの自分中心の考え方を改めて、何が神に喜ばれることなのかをわきまえるようにと勧めています。今世界中で新型コロナ感染症が話題になり私たちの考え方もいかにコロナに罹らないようにするかに注意を注いでいますが、それも大事ですが、私たち以上に生活に困っている人たち、「私の隣人」の助かりに力を注ぐことが大事ではないでしょうか。

福音朗読　（マタイよる福音書　１６章 ２１～２７節）

　今日の福音は先週の福音の続きです。「あなたはメシアです！」と答えたペトロ。褒められたかと思えば今日は「サタン引き下がれ！」と怒られてしまいます。何が良くなかったのでしょう。イエスがこの先の自分の歩む道を語ったときペトロは人間的な心情から「そんなことが起こりませんように」と、諌めるのです。私たちの常識的な反応でもあります。しかしイエスにとっては、自分の行く道を邪魔されたくなかったのでしょう。勇気を振り絞っているときに、その勇気を弱めてしまうようなペトロの言葉だったのだと思います。イエスは神の子ですからそのような受難の道をいとも簡単に忍んでいけると考えがちですが、後にゲツセマニの園で、血の汗を流されたように、自分を父である神と人類の和解のいけにえとしてささげることは大変な苦しみを伴うものであったのです。ですから私たち人間も救いに至るためにはイエスと同じように自分の十字架を背負ってイエスに続くようにしなければならないのです。第二朗読のパウロの考えもこの線に沿っています。「何が神に喜ばれることなのか」は、実に自分の十字架を背負ってイエスに従って歩むことなのです。自分の十字架を放棄したり嫌がったりせず、勇気をもって背負っていきましょう。

９月に入ります。酷暑の８月でしたが、これからは暑さ疲れが出てきます。体調管理に気を付けましょう。皆様お大事に。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光